

魔法探し

豊島与志雄

青空文庫

むかし、ペルシャに大変えらい学者がいました。天地の間に何一つ知らないことはないというほど、あらゆる学問をきわめつくした人で、国王や人民達から非常に尊敬されていました。

ところがある日、高い塔の上から濠ほりの中に落ちて死んだ人を見て、彼はこう考えました。

「鳥は空を飛ぶことができるし、魚うおは水の中を泳ぎ廻まわることができきる。それなのに人間だけは、空を飛ぶこともできず水にもぐることもできない。なぜだろう。もしそういうことができたなら、

人間は塔から落ちても死なないですむし、水の中に落ちても溺れずにすむのだが……」

そしていろいろ考えたすえ、彼はふと魔法使いの話を思い出しました。子供の時お祖母様ばあさまから聞いた話で、自由自在に空を飛んだり水にもぐったりするということです。けれどもそれはただ話に聞いただけで、いくら彼が学者でも、まだ魔法だけは知らないのでした。

「話にある以上は、実際にあることかもしれない。私はもう世の中のあらゆる学問をしつくしたのだから、これから魔法を学んでやろう」

そう決心した彼は、いろんな古い書物を調べたりいろんな人に

尋ねたりしましたけれど、どうしたら魔法が使えるかさらに分かりませんでした。けれども、魔法使いの話が伝わっているからには、どこかにそういう者がいるに違いありません。

そこで彼は、王様や人々に別れを告げ、多くの旅費を用意して驢馬ろばに乗って、魔法使いを探しに出かけました。

幾年も彼は旅を続けました。魔法使いの住居すまいを、遠くから来た旅人や方々ほうぼうの学者に尋ねたり、自分で探し廻ったりしましたが、どうしても分かりませんでした。しまいには、用意の旅費もなくなってしまう、驢馬を売り払った金も使ってしまう、乞食のような旅をしなければならなくなりました。それでも彼は決心を変えませんでした。どうにかしてその日の食物を手に入れながら、方

々の土地を歩き廻りました。

さらに幾年かの後、^{のち}彼はある広い広い森の中に迷い込みました。いくら行っても森ばかりで、人の姿はおろか、人の通った跡さえも見えません。何千年経ったとも分からない大木が立ち並んでいて、その枝葉の茂みで空を隠していて、昼は日の光も見えず、夜は月の光もささず、地面には落葉が^{うずたか}堆く積もって、気味の悪い^{こげ}苔などが生えています。彼は落ちてゐる木の実や苔の間の^{きのこ}茸などを食べ、ところどころに湧き出てる泉の水を飲み、疲れると一枚の毛布にくるまって落葉の上に眠り、そしてただ真つ直ぐに歩いて行きました。けれどやはり、どこまで行っても森ばかりです。

そうして幾日か経った後、彼は木の実をかじりながら歩いてい

ますと、ふと向こうに、晴れやかな日の光を見いだして、小踊りせんばかりに喜びました。長い間の疲れも忘れはてて、急いでやって行きますと、まあどうでしょう、森の中に大きな池がありまして、澄みきった綺麗な水がいつぱいたたえていまして、池の縁ふちやまわりには、真つ白な花が一面に咲き乱れていて、その上に晴は々とした日の光がさしているのです。彼は久し振りに日の光を見て、しばらくはぼんやりつつ立っていました。やがて気がついてみると、池のまわりの木には小鳥が鳴いているし、花のまわりには蝶や蜂などが飛び廻っています。深い森の中にそんな天国のような場所があるとは、夢にも思わなかったのです。彼はまず池の清い水を飲み、それから日の光にあたって、あたりの景色

を眺めましたが、そのままいい心持ちになって、うつらうつらと眠ってしまいました。

二

彼が眼をさました時は、もう夜になっていました。月の光がさ
して、池の面が水銀おもてのように輝き、白い花が気味悪いほど真
つ白に浮き出して見えます。彼は木影こかげに坐ったまま、夢心地でぼ
んやりしていました。

すると、方々から綺麗な女達が出て来ました。みんな腰から上

は真まつ裸ばだかで、腰にいろんな色の薄うす絹ぎぬをつけてるのです。森の中から出て来たのは緑色の絹をまとい、水の中から出て来たのは水色の絹をまとい、白い花の咲くさむらいてる叢むらから出て来たのは白い絹をまとい、そしてその女達が池の緑の青草の上に集まって、歌ったり、踊ったりし始めました。彼はびっくりして息をこらして眺めていましたが、やがて、それは書物にあつた森の精や水の精や花の精達だと覺さとつて、なおよく見るために、木影から少し進み出て行きました。とたんに、精女達の一人が彼の姿を見つけて、何か合図をしたかと思うと、皆の姿は煙のようにどこかへ消え失せてしまいました。

彼はあつと口と眼とを打ち開いたまま、そこにぼんやりつつ立

っていました。

しばらくすると、後ろの方の大きな木の茂みの中から、恐ろしい声が響きました。

「お前は何者だ」

彼はびっくりして振り向きましたが、何の姿も見えないで、木の枝葉が黒々と茂ってるばかりでした。がまたその中から、恐ろしい声が尋ねました。

「お前は何者だ。何しにここへ来たのか」

そこで彼は、声の主はきつと森の王で精女達の主人だろうと思つて、丁寧に答えました。

「私はペルシャ第一の学者で、天地の間に何一つ知らないことは

ないのですが、ただ魔法だけを知らないものですから、今度はそれを学ぼうと思つて、魔法を知つてる人を方々ほうぼう尋ね歩いて、ここまでやつて来た者でございます」

「そうか」と恐ろしい声は答えました。「ここは人間のやつて来る所ではない、また魔法使いの住んでる場所でもない。しかしお前の熱心に免じて、魔法めいた術を少し教えてやつてもよい。その代わりお前に一つ尋ねたいことがある。お前は天地の間に何一つ知らないことはないと言うが、それでは、空の星の数は幾つであるか、そしてお前の頭の髪の毛は幾本であるか、それを答えてみよ」

彼は困りました。いくら学者だからといって、空の星の数や自

分の頭の毛の数は知りませんでした。彼が黙っていると、恐ろしい声はまた言いました。

「何一つ知らないことはないと言っておきながら、それくらいのことでも知らないのだな。それでは三日の間待^{あいだ}つてやるから、それまでに答えをせよ。もし三日の間に答えられなかったら、この池は底無しの池だから、この中に身を投げて死んでしまえ。はつきり答えられたら、お前の望み通り、自由自在に何にでも姿を変え、術を教えてやる」

「承知しました」と彼は答えました。

それから彼は三日の間、空の星は幾つであるか、自分の頭の髪の毛は幾本であるか、一生懸命に考えました。しかしそんなことは、いくら考えても分かりようはありませんし、また一々数えることもできません。

あたりは深い森であり、前には底無しの池があり、池の縁には白い花が咲いています。けれどただそれきりで、もう空が曇って、日の光も月の光もささず、蝶や小鳥も飛んで来ず、精女達も出て来ませんでした。彼は池のほとりに坐って、両手を組み齒をくいしばって、三日の間一生懸命に考えましたが、空の星の数も自分

の頭の毛の数も分かりませんでした。

三日目の夜になると、彼はもうとても駄目だと思つて、悲しもうに立ち上がつて、ふらふらと池の縁までやつて行き、思い切つて真逆様まつさかさまに池の中へ飛び込みました。とたんに、空の星の数と自分の頭の毛の数とがはつきり分かりました。それは大変な数でした。もうその数を言うだけの隙すきがありませんでした。彼の身体からだは底無しの池の中に、真逆様にずんずん沈んでゆきます。そして上の方に、池の面おもてや白い花や急に晴れた空や月の光などが、ぼんやり見えまして、花の間には精女達が歌い踊っています。彼はだんだん深く沈みながら、それらの景色をぼんやり眺めてるうちに、いつしか気が遠くなつてしまいました。

四

人知れぬ時間が経つてから、彼はふと我に返りました。見ると、自分はいつのまにか、幾十年か前に出た家に戻っていて、寢床の上に寝ているのでした。髪の毛は真つ白になり、手足は瘦せ細り、腰は立たず、ひどく年をとって死にかかつてるのでした。彼はびつくりして眼を見開きましたが、森の中のことを思い出すと、急いで星の数と頭の毛の数を言つて、そのために不思議な術を得て、死なない前に自分の身体を石にしてみました。

石になった彼の身体は、やがて家の人達に見いだされ、それから大変な評判になって、王様の耳にまで聞こえました。王様は石になった彼を宮殿に運ばせて、魔法探しに出てからのことをいろいろ尋ねられました。彼はもう石になってしまっていました。で、何一つ口を利くきことができませんでした。それで、不思議な魔法めいた術のことも、空の星の数も頭の毛の数も、誰にも伝えられずに、ただ彼の石の身体だけが、永く残りまして、学者達から尊とうとばれおがばれまれています。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話作品集」 夢の卵」 銀貨社

1999（平成11）年12月17日第1刷発行

入力：田中敬三

校正：noriko saito

2007年8月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魔法探し

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>